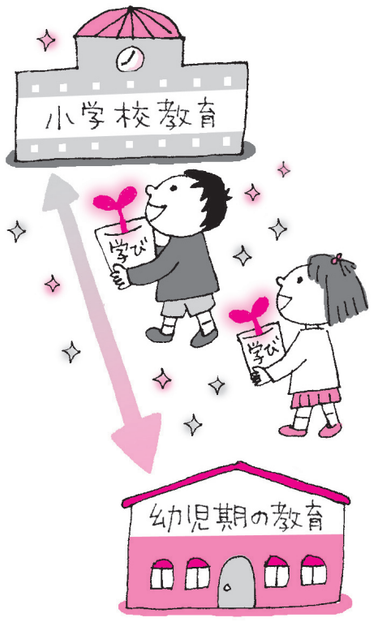
特集

# 園の遊びがもたらす幼児期の「学びの芽生え」

園での遊びは、小学校以降の学びにどのようにつながっているのでしょうか。この点を十分に理解することは、幼児期の教育と小学校教育の接続を進めていくうえで非常に大切です。
ここでは、幼児期の「学び」について改めて考え、具体的な援助のあり方を探っていきます。

幼児期の教育にかかわる幼稚園・保育所・認定こども園の先生がたへ

## 「学びの芽生え」から幼小接続※1を考える




### 幼小の「学び」の接続を意識した援助が求められている

「幼小接続」の取り組みが今、全国的に広がっています。いわゆる小１プロブレムが社会的な課題となる中で、幼児期の教育と小学校教育がこれまで以上に連携し、園ではぐくんだ力を土台に、小学校での生活を積み上げていくことが求められています。

幼小接続を効果的に進めるには、小学校入学前の「準備」にとどまることなく、園から小学校への学びのつながりを踏まえた援助を保育者が行うことが重要です。そこで、幼小接続に必要な要素の中でも、特に「学び」を中心に特集を構成しました。

### 幼小接続のキーワード「学びの芽生え」

キーワードになるのが、幼児期にはぐくんでおきたい「学びの芽生え」です。これは、文部科学省「幼小接続会議※2」から出された報告書（2010年11月）で提唱されている言葉です。本誌では同会議の座長・無藤隆先生、副座長・秋田喜代美先生に分かりやすく解説していただいています。

園で、はぐくんでおきたい力や小学校入学に向けた援助を見つめ直すヒントにしていただければと思います。

### こんな園長先生におすすめ

◎保護者に幼児期の遊びの意義を伝えるのが難しいと感じている
◎幼小接続・連携を充実させたいと思っている
◎遊びの中から、どのような学びが得られるのかを知りたい
◎園全体として子どもの援助の方針を統一していきたい

※１「幼小接続」とは、幼稚園と小学校の接続のみではなく、幼稚園・保育所・認定こども園が行う幼児期の教育と小学校教育の接続を表しています。
※２　正式名称は、「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」。記事の中では、「幼小接続会議」と表記しています。





インタビュー 1

## 「学びの芽生え」が生涯の学びの出発点になる

幼児期の遊びの中での「学びの芽生え」が、今注目されています。
学びの芽生えとは具体的にどのような状態を表し、なぜ子どもにとって重要なのでしょうか。
文部科学省「幼小接続会議」の座長を務めた白梅学園大学の無藤隆先生に解説していただきました。

白梅学園大学子ども学部教授
**無藤　隆**
むとう・たかし
白梅学園大学子ども学部教授、同大学院子ども学研究科長。「幼小接続会議」座長のほか、文部科学省中央教育審議会委員などを歴任。専門は発達心理学・教育心理学。著書に『保育の学校（全3巻）』（フレーベル館）など。

### 幼児教育は小学校の「準備」ではなく「土台」

幼稚園、保育所、認定こども園における幼児教育・保育はどうあるべきか、そしてそれを小学校にどのようにつなげるべきかということが、文部科学省「幼小接続会議」の重要な論点でした。近年、幼小接続が注目されている直接的な背景には、いわゆる小１プロブレムがあるのですが、この問題を解決するには、単に幼稚園・保育所などが「準備教育」をすればよいわけではありません。幼児教育を、小学校以降の教育の「土台」ととらえ、一人ひとりの子どもに対して長期的な視野をもった援助をする必要があります。

全国で幼小接続の実践も活発になってきていますが、必ずしも期待通りの成果はあがっていないようです。その要因には３つが考えられますが、これらはいずれも幼児教育の本質が十分に理解されていないことに根ざしています。

１つは、先ほど述べたように、幼児教育を小学校の「準備教育」と考え、読み書きや計算、長時間椅子に座る練習などに終始してしまうケースです。確かに、そのような指導が必要な面もありますが、それは幼児教育の本質ではありません。

２つめは、逆に「幼児期は遊んでいればいい」という発想です。遊びが大切なのは、その中に情緒の育ちを含めた「学び」があるからです。保育者がその点を理解せず、単に子どもが遊んでいるだけでは、なかなか学びは生じません。

３つめは、幼児教育を基盤として、その上に小学校の学びを積み上げていくという意識を、小学校側が十分にもっていないケースです。子どもは遊びの中で、興味をもったり、

気づいたり、考えたりする力を伸ばしていますが、それを小学校側が理解せず、ゼロからのスタートという意識をもっていることもあるようです。

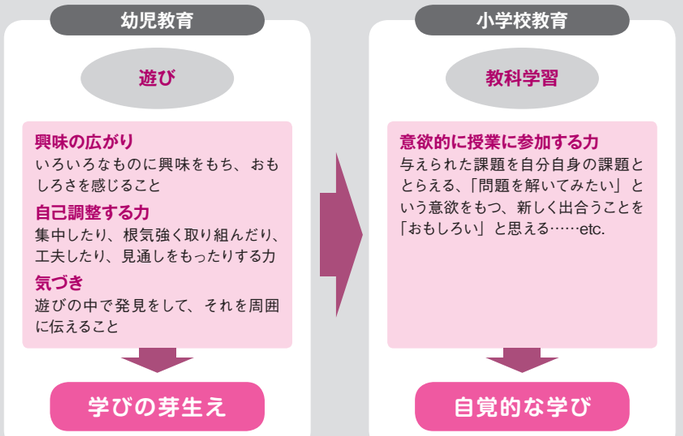
幼小接続が目指すのは、幼児期の教育と小学校教育が相互理解を深めながら、お互いの良質な部分を取り入れ合うことです。それによって子どもは園における学びを土台として、小学校以降の学びをスムーズに発展させることができます。

## 「学びの芽生え」があって「自覚的な学び」が生まれる

幼小接続を考えるうえで重要なのが、子どもの学びがどのように発展していくかを理解することです。幼小の双方の関係者が「幼児期の『学びの芽生え』から、小学校低学年の『自覚的な学び』へ」というつながりを十分に踏まえた援助や指導を心がける必要があります。

具体的に説明しましょう。「学びの芽生え」とは、遊びの中で、楽しみ、試し、工夫し、見通しをもつというふうに、子ども自身が遊びを発展させていくことです（具体例は次ページ図２を参照）。幼稚園教育要領で言えば、「体験の関連性」（第３章を参照）を指します。例えば、葉っぱをすりつぶしている子どもは、初めは保育者のまねをしますが、楽しくなると、木の実で試したり、異なる色水を混ぜる工夫をしたりしながら、次第に「こんな色を作りたい」「何かを染めてみたい」といった目的や計画をもって遊ぶようになります。これが、学びの芽生えです。

図１　幼稚園・保育所から小学校への「学び」のつながり




学びの芽生えは、小学校低学年で育つ「自覚的な学び」の土台になります。自覚的な学びとは、先生が与える課題に興味をもち、自分の課題として受けとめ、「解いてみたい」という意欲をもって学ぶことです。単におとなしく椅子に座っているのではなく、意欲的に授業に参加する力と言うこともできるでしょう。

## 「学びの芽生え」は遊びの中でこそ経験できる

学びの芽生えがどのように自覚的な学びへとつながるかは、学びの芽生えをもたらす３つのポイントを説明することで理解していただけるでしょう。それは、「興味の広がり」「自己調整する力」「気づき」です。

「興味の広がり」は、遊びの中でいろいろなものに興味をもち、おもしろさを感じることです。これが十分に育った子どもは、小学校に入ってから、算数の問題を解くのも、生活科で町を探検するのも、おもしろいと感じるようになります。

「自己調整する力」とは、集中したり、根気強く取り組んだり、工夫したり、ときには我慢して先を見通しながら自分をコントロールし、今の遊びをつくっていく力です。この力は、長期間の活動をコツコツと続ける中で育ちます。特に、５歳～７歳の時期に育てることが重要で、十分に育たないと、小１プロブレムが起こりやすくなると考えられます。

「気づき」は、思考力の芽生えと密接に関連します。例えば実をすりつぶしたら、「こんな色になった！」という発見が気づきです。気づきがあると、それを言葉にして友だちや先生に伝えたくなります。気づきやコミュニケーションを繰り返す中で、思考は深まるのです。

ここで強調したいのが、学びの芽生えは遊びの中でしか経験できないということです。ですから、小学校への準備教育だけでも、逆に単に遊ばせるだけでも、幼児期の教育としては不十分です。保育者に最も求められるのは、学びの芽生えを促すことを強く意識しながら遊びの援助をすることなのです。

小学校での学びは、中学校や高校、大学、そしてその後の人生へとつながっていきます。その出発点になるのが幼児教育であることを認識し、学びの芽生えを育てる援助を実践していただければと思います。

図２　援助例（色水遊びの場合）

（５歳児／７～９月頃）

最初は、保育者のまねをして、葉っぱをすりつぶして色水を作る

学びの芽生え
- 興味：・保育者が葉っぱや草の実をすりつぶしているのに興味をもつ
- 気づき：・葉っぱをすりつぶすと、色が出ることに気づく

援助　他の葉っぱや花、草の実を用意しておき、子どもが気づくような環境をつくる

さまざまな素材を使って、異なる色の色水作りを楽しむようになる

学びの芽生え
- 興味：・葉っぱだけでなく、花の実にも興味が広がる
- 気づき：・他の材料を使うと、別の色ができることに気づく

援助　色水を混ぜると、異なる色になることに気づくようにし、この気づきに共感する。ペットボトルなどを多く準備する

色水を混ぜて、いろいろな色を作って遊び始める

学びの芽生え
- 自己調整：・自分の好きな色を作るために、各色水の量を加減して混ぜるなどの工夫をする
- 気づき：・色水を混ぜると、別の色になることや同じ色でも濃淡があることに気づく
・自分の色水を友だちに見せて、気づきを伝え合う

援助　子どものつぶやきを周囲の子どもにつなぐ、また、別の遊びに発展させていく（和紙染めやジュース屋さんごっこなど）

色水遊びから発展して和紙染めを楽しむ

学びの芽生え
- 興味：・色水作りから和紙染めに興味が広がる
- 自己調整：・好きな色に染めるために工夫し、うまく染まらなくても根気強く取り組む
- 気づき：・予想と実際の違いに気づき、不思議さを感じる
・和紙に色水が染みる不思議さを感じる。

### ここから始めてみませんか？「学びの芽生え」を促す援助

**◎遊びを発展させましょう**
同じ遊びを繰り返すのではなく、今日、明日、来週……と、少しずつ複雑な遊びへと発展させることが大切です。毎日の保育記録を振り返り、翌日以降の計画を練るとよいでしょう。

**◎協同的な活動を入れましょう**
５歳になったころから、特にグループで行う協同的な活動を重視してください。１日では終わらない連続的な活動の方が協同的な活動を通した学びは深まりやすくなります。

**◎言葉による伝え合いを取り入れましょう**
帰りの時間に何をして遊んだかを発表し合うなど、形式はさまざまで構いませんから、実物提示と一緒に言葉による伝え合いの活動を取り入れましょう。

### 現場のみなさんへ

◎幼児教育の潜在的な価値は、まだまだ世の中に十分には伝わっていないと感じます。学びの芽生えが注目されている今は、幼児教育の本当の意味を伝えるチャンスといえます。これまでに幼児教育が取り組んできたよい部分を、さらによくするという気持ちで、自信をもって子どもに接してください。

インタビュー 2

# 保育者の「遊びの見通し」が「学びの芽生え」に結びつく

学びの芽生えを促す援助に決まったかたちはありません。必要なのは一人ひとりの子どもの状態に合わせた柔軟なサポートです。援助を行ううえで、園全体で共有したい考え方や具体的な実践方法について、「幼小接続会議」の副座長を務めた東京大学の秋田喜代美先生にうかがいました。

東京大学大学院教育学研究科教授
**秋田喜代美**
あきた・きよみ
東京大学大学院教育学研究科教授。日本保育学会会長。専門は保育学、発達心理学、教育心理学、教師教育。著書に、『保育の心もち』『保育のおもむき』（いずれもひかりのくに）など。

## 学びに向かうきっかけは大人も子どもも同じ

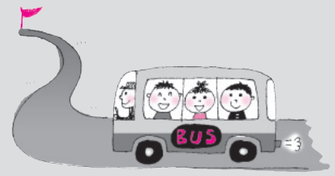
幼児期の子どもは、どのようなきっかけによって「学び」に向かうのでしょうか。私は、子どもも大人も大きな違いはないと考えています。例えば、大人が、毎日同じ料理をルーティンワークとして作るだけなら、何も考える必要はありません。しかし、ふだんとは食材を変えてみたり、お客さんをもてなしてみたりといったきっかけで、工夫しようという気持ちが生まれます。子どもも同じで、遊びの中から生まれたきっかけを育てていくことによって、初めて学びが生まれるのです。

しかし、大人にも、常に学び続けようとする姿勢をもつ人ともたない人がいます。これは、幼児期に十分な「学びの芽生え」を経験し、それが小学校以降の学びへとつながったかどうかが大きく関係するものと思われます。

### 生涯学習の基盤として世界的に注目される幼児教育

◎1990年ごろから、「保育の質の効果」、そして幼稚園から高校までの「教育課程の一貫性」について、アメリカやイギリスなどを中心に議論が盛んになりました。背景には、幼児期の学びがその後の人生に多大な影響を及ぼすという考えが広く知られるようになったことなどがあります。幼いころから「わからないことを調べたい」という気持ちが育っていれば、例えば、大人になったときに自分から健康に関する情報を調べて健康管理に生かすなど、さまざまな場面で新しいものを取り入れて自分の生活をより豊かに、より幸せにすることができます。そのように、生活者として学び続ける生涯学習の基盤として幼児教育が重視されているのです。

図1 幼児教育と小学校教育の違い

| 幼児教育 | 小学校教育 |
|---|---|
| 一人ひとりのペースに合わせて散歩するイメージ。目的地に到着することより、途中でさまざまなものに関心を抱くことを重視。 | 全員が同じバスに乗って、決められた目的地に時間通りに到着するイメージ。 |
| |  |
| ◎個々の子どもの個性を重視し、自由な遊びの中で「学びの芽生え」を促すことを目指す。 | ◎最低限必要な知識・技術などを身につけるために、すべての子どもが共通の目標に向かって学ぶ。 |

幼児期の学びの芽生えは、幼児教育と小学校教育の違いをイメージするととらえやすくなるでしょう。小学校教育は、すべての子どもが電車やバスに乗って決められた目的地に時間通りに到着するようなイメージです。窓から景色を眺めるなど、多少の行動の自由はありますが、基本的には集団で同じ方向に進んでいきます。

一方、幼児教育は、一人ひとりのペースに合わせた散歩です。「自分のペースで歩いた」という自信を付けたり、目的地への到着よりもその過程でさまざまなものに興味をもつことを大切にします。

ただし、散歩にも地図は必要です。どのような方向に育ってほしいかという地図を保育者がもち、子どものペースに合わせて導いていく必要があります。その意味では、保育者には、子どもの育ちを俯瞰（ふかん）的に見る「タカの目」、そして子どもに寄り添う「アリの目」の両方が必要と言えるでしょう。

子どもが幼小の違いをスムーズに乗り越えていくには、保育者が小学校教育へのつながりを意識する必要もあります。そのためには、小学校学習指導要領を読んだり、小学校低学年の授業を見たりすることも大切になります。

## 学びを促す援助の基本は「関心」のありかを知ること

では、学びの芽生えを促すために、保育者はどのような援助をすればよいのでしょうか。これは、どのようなときに学びが起きるのかを理解することが基本になります。

そもそもこの時期の子どもは、小学校以降のように「○○をしなさい」といった保育者の言語的指導で学ぶのでしょうか。確かに、そういう場面もありますが、それでは学びの芽生えを促すことはできません。保育者の援助を通じて「もの・ひと・こと」に深くかかわる中で、子どもは「自ら」学ぶのです。

例えば、昆虫を見つけたとき、保育者が「図鑑で調べよう」と促すのは、よく見られる援助です。子どもが昆虫の名前を知りたがっているのなら、それでよいと思います。しかし、「石の下にたくさん虫がいる」「同じ種類なのに大きさが違う」といった点に関心があるのなら、それらを探求していくための援助によって、子どもは昆虫とより深くかかわり、学びの芽生えが促されます。つまり、子どもの関心のありかを捉えることが、学びの芽生えをうながす出発点になるのです。

ただ、学びのきっかけは保育者が意図した通りに起こるとは限りません。静電気で体にビニールがくっつくことに気づいた子どもがいるとしましょう。こうした瞬間は、学びの芽生えを促すチャンスです。保育者がそれを見逃さずに一緒になって興味をもち、他の子どもに働きかけたり、別の素材で試すように促すことで、偶然のきっかけが学びにつながっていくのです。

## 安心できる環境の中で「広げる」「深める」

次に園における環境づくりの2つのポイントを説明しましょう。

1つめは、ふだんから大切にされているとは思いますが、学びの芽生えを促すうえで、一人ひとりの子どもが、保育者や仲間から「自分は認められている」という安心感を抱け

る環境は不可欠です。子どもは、不安があるうちは、決して学びに向かわないからです。

そして２つめは、活動を「広げる」「深める」という視点を園全体で共有することです。「広げる」は、ひとりの遊びを仲間との遊びにつなげたり、異なる環境や素材で試したりすること。そして「深める」は、保育者がつねに活動の見通しをもって、子どもとともに考えて次の一歩に展開させていくことです。

例えば、積み木遊びでより高く積みたいという子どもの関心を支えるのは、「深める」援助です。こうした援助により、子どもは「土台が大きくないと不安定になる」などと学び、活動は深まっていきます。一方、積み木で作った建物を駅に見立て、ほかの子どもとともに電車ごっこをするように導くのは「広げる」援助と言えます。２つの援助ははっきりと分けられるわけではありませんが、保育者が違いを意識して場面に応じて援助を使い分けることで活動を展開させやすくなります。

そのために必要なのが、保育者が「遊びの見通し」をもつことです。これは、例えば、牛乳パックでイカダを作る活動で、「どれくらいの大きさを作れるか」「イカダを使って、どんな遊びができるか」といった次の展開の見通しをもっておくことです。保育者が子どもの発達段階や遊び・生活経験などを踏まえて遊びの展開を見通し、複数の援助を想定しておくことで、活動の「広がり」や「深まり」がうながされます。

### 「学びの芽生え」を促す援助のポイント

**1.「周囲から認められている」という実感をもたせる**

子どもは心に不安を抱えていると、学びに向かいません。一人ひとりの子どもが保育者や仲間から「認められている」と実感できる環境を整えましょう。

**2. 遊びを「広げる」「深める」という視点をもつ**

子どもが遊びこめるように、ほかの子どもなどに「広げる」、１つの活動を「深める」という２つの視点をもち、場面に応じて援助に取り入れましょう。

**3. 保育者が「遊びの見通し」をもつ**

発達段階や遊び・生活経験などを踏まえ、「どのように展開させるとよいか」という遊びの見通しをもっておくことで、先を見据えた援助になり、子どもの学びをうながしやすくなります。

## 保育の場面を共有した研修で遊びを見通す力を養う

しかし、経験の浅い保育者にとって長期的な遊びの見通しをもつのは難しく、目の前の子どもを追うだけの援助になってしまいがちです。すると、気になったことを、あれもこれもと指示するような援助になり、子どもが創意工夫をするチャンスが失われてしまいます。

一方、ベテランの保育者は「今は無理でも、半年後には自然に友だちと一緒に協力するようになるだろう」といった長期的な見通しをもつため、「今、指導しなくてよいこと」が見極められます。これは、学びの芽生えを促すうえで、とても大切なことです。

ですから、どの保育者も遊びの見通しをもてるような園内の環境づくりが求められます。若手の保育者がベテランの実践を見学したり、前年度の記録を確認したりすることは、活動の内容や子どもの育ちへの理解につながるでしょう。記録や写真、ビデオなどをもとに活動の場面を共有し、保育者同士が、子どもの学びや援助について話し合う研修も、遊びの見通しを養ううえでは有意義だと思います。

学びの芽生えを促す援助は、いわゆる早期教育とは本質的に異なります。保育者のみなさんは、子どもの中にゆっくりと育つきめ細かな芽を見つけ、育てていくという視点を大切にしてください。

### 現場のみなさんへ

◎園のみなさんが多忙であることはよく理解していますが、忙しさのあまり心の余裕まで失うと、子どもに対する要求が多くなってしまいがちです。「学びの芽」は、じっくりと子どもを見つめたときに見えてくるものです。心にゆとりをもって朝から笑顔で子どもを受け止められるように、あまり無理はせず、どうか健康にも気をつけてください。個々の保育者らしさ、園らしさを大切にしながら、「学びの芽」をはぐくんでいただきたいと思います。

※2011年春号掲載